

## ふるさと探訪

# 気まま・月づ期・思いつ記

## 気まま・其のまま・在るがまま

ふと気づいた四季や季節の移り香、月毎の期限や期待の数々、そして心に浮かんだ記憶や付記の思いつき等を書き散らしながら、ふるさとの今昔を探訪してみたい。

気まま……勝手気儘、傍若無人、自分の知ったことでない「我関せず」などの

「知らん顔症候群」が増えている。昨今、気配りや思いやりの温かさが求められるのもまた当然といえ

よう。

我がままを言う身勝手な子どもなどと、まるで気ままの典型みたいにいわれるが、果たしてそうであるうか。むしろ、大人への痛烈な批判や警告というべきであるう。

「わたしはほんに気ままに生きて来たが、ちよっぴり気を使って来たことといったら、そつたなるべく人様に迷惑をかけんようにしたいと思つて暮らして来たことぐらいかね。」と、ゆつたり調のおしよばあちゃん(四男五女を育てた働き者(九十歳没)で晩年は「元気で歩ける間はどこにも行かんよ。」と、雑木林から焚き木を運んだり、野菜づくりや山菜取りをしたりした独居三昧・自由自適の人であった。

其のまま……ひき続き、もとからの通り、そっくり、そのまんま等といえど何となく「投げやり気

分」が先立つ。そして「兎追いしかの山 小鮎釣りし かの川」の忘れ難い故郷の里山や小川、ツクシ・やちぶき・福寿草、蝶々・こおろぎ・赤トンボ、李・なし・くり・サクランボなどと、其のままにしておきたい人と自然の原風景が急速に変化していることに気づく。

大雪の そつと其のまま 岩清水(純夏)は正に「飲水思源」そのものであり、郷の音の 響き其のまま 稲穂波(思秋)には「育稲知食」そのものである。マンネリに注意し、流行に留意し、少しだけのゆとりを留意した常作じいさんは「床の間づくり」の名人大工であった

オンコやエンジユの自然木を其のままに生かしながら、独特の匠の技でセツトした「ちがいで」のすばらしさは、人と自然の美そのものであった。これらの民家も今はもう無いが……。

在るがまま……成り行きにまかせると、もう「どうでもいい、捨て鉢、自暴自棄」のどんでもないことをいうけれど、「焦り・歯

痒さ・擬かしさ」などを乗り越える、いわば逆境にめげないための処世術に必要なのが「在るがまま」の真意ともいえそうである。

既報二〇〇四年(平成十六年)六月でも紹介した宗教評論家ひろさちや先生は、あるがままが素晴らしいことであり、現在の自分が、あるがままの自分を大事にするべき」と説いておられるし、長坂久官司(熊石町根崎神社)も二十歳のころ、職場で愚痴をこぼしていた若手に、先輩が「在るがままに生きられよ」と論ずるのを耳にしたと言われる。

とは言え、在るがままには「自分ができる努力」がベースになるはずである。何もしいといつてではなく、「変に、無闇に、我武者羅に背伸びをしない」で、「ほどこどの人生」を過ごすことではなかるうか。

さて、書き散らしが書きなぐりになったが、矛盾の克服こそが生きる証と「ままならぬ現在」を生きよつと思つが、さて……。

(元)郷土史編集専門員  
尾池隆男



”まま三語”

人口/7,521人(前月比△76人)、男/3,608人(前月比△26人)、女/3,913人(前月比△50人)  
世帯数/2,891戸(前月比△35戸)、出生/4人、死亡/13人、転入/63人、転出/128人 【3月31日現在】  
※住民登録の手續き上、人口増減と出生・死亡・転入・転出の増減は一致しないことがあります。



本誌の印刷には、大豆インクを使用しています。  
また用紙には再生紙(100%)を使用しています。